

第7回 片岡啓子先生のこと

今回は、我々栃木県オペラ協会が、令和5年度から毎年ご指導頂いている片岡啓子先生についての特集です。

まずは、先生のプロフィールをご紹介します。



特別講師 片岡啓子先生

国立音楽大学卒業。同オペラ研究室修了。ミラノ・スカラ座歌手養成所修了。畑中良輔・畑中更予・グアリーニ・ベルトラミの各氏に師事。1976年文化庁在外派遣としてミラノ留学。1979年ヴェルディ国際声楽コンクール第3位（1位なし）に入賞し、一躍注目を集める。1981年パルマ王立

歌劇場ヴェルディ「アルツィーラ」でデビュー後、イタリアを中心に「アッティラ」「ナブッコ」「アイーダ」「ドン・カルロ」等に出演。日本では二期会、藤原歌劇団公演にて「仮面舞踏会」「トスカ」「蝶々夫人」「トゥーランドット」他多数のオペラ公演に出演。帰国後は後進の指導にあたる傍ら国内外で幅広く活躍。「ヴォーチェ・ヴェルディアーナ」（ヴェルディー歌いの声）と評される圧倒的なベルカントで人気実力とも日本を代表するソプラノ歌手の一人である。

以下は、片岡先生のイタリア留学時のご経験と『ヴェルディ』との出会いについての貴重なお話しです。



イタリアの思い出 ～『ヴェルディ』との出会い～

片岡啓子

私にとって『ヴェルディ』とは、28歳でイタリアに渡るまでは他の作曲家と同じ様に素晴らしい曲を書いた偉大な作曲家の一人と認識していました。

1978年に文化庁の在外派遣として、ミラノで声楽教師として高名なリア・

グアリーニ先生の1回目のレッスンを受けた時に、先生が初めて発した言葉が「ああ、貴女は『ヴェルディアーナ』ね！」でした。殆ど言葉が解らなかったけれど、『Verdiana』つまりヴェルディの曲を歌うのに合った声、ということだったのです。言葉も意味も解らなかったけれど、それからヴェルディのオペラアリアばかりレッスンで学びました。後から話してくれたのですが、先生は翌年5月にブッセートで行われるヴェルディコンクールを受けさせようと思っていたようです。

確か翌年の3月か4月にはミラノの音楽家の為の養老院と言われているヴェルディのお墓の有る所に素晴らしい自然の音響のサロンが有って、そこでの音楽会に参加させてくださって、コンクールで歌う曲を事前に歌った記憶があります。その時は『ヴェルディアーナ』という言葉は知ったけれど、まだ全く実感も無いままでしたが……。

5月になり、ヴェルディコンクール（このコンクールは全ての曲がヴェルディだけだったのですが）を受けたら、世界中から受けに来ていてとにかく良く響くホールだったので、歌う前に待っている所に素晴らしい大音量が聴こえてきて、私はまだ半年位で言葉もまだまだ曖昧だし、怖くて耳を塞いでいました。なんでこんな所に来てしまったのだろうか？なんて……。でも歌っている間は、私が参加料を支払って得た時間だからと勇気を出して歌った事を覚えています。

結果は1位無しの3位になって(!)嬉しいよりビックリしました。そしてその時にも「Voce verdianaだ」と審査員からもコンクール専属ピアニストからも言われて、どうやら私は『verdiana』らしいと認識し始めました。

そして、更にこのコンクールの審査員の中にミラノスカラ座歌手養成所の所長さんが居て、9月からの養成所新年度に勉強しに来ませんか？とグアリーニ先生に連絡がありました。その所長曰く。「声は良いけれど音楽が…外国人だから……。」と。それは、イタリア滞在まだ半年だったから仕方のないことでした。よろこんで直に行きたかったのですが、日本で重要なお仕事が決まっていて、戻っても翌年2月になるが、ぜひ勉強したい！と我儘を言ったら認められたのです。

こうして、それまではオペラを見に行くだけだったスカラ座が勉強する場所になりました。そしてオペラの黄金時代(トスカニーニが指揮をして、カラスやテバルディが活躍した1950年代)を身を持って体験してらしたレジェンドのマエストロ達に、厳しくも今となっては宝物の様な時を頂きました。

次は、片岡先生がかつてご出演なさった有名な演奏会のCDについてご紹介させていただきます。



マーラー作曲 交響曲第2番「復活」

片岡啓子（ソプラノ）・伊原直子（アルト）

武蔵野音楽大学合唱団

ロリン・マゼール指揮 読売日本交響楽団

（読響第240回定期演奏会 1987年5月9日 東京文化会館）

YNSO Archive Series by Tobu Recording

← 写真中央で歌っているのが片岡先生

マーラーの交響曲

グスタフ・マーラー（1860年～1911年）は、ウィーンで活躍した作曲家・指揮者です。生涯に10曲の交響曲（第10番は未完）を書いています。その特徴は、演奏時間が長く、声楽を取り入れている曲が多い（第2番・3番・4番・8番）ということです。その中でも第2番「復活」は、ソプラノとアルトの独唱と混声合唱を伴う壮大な曲で、マーラーはベートーヴェンの「第九」を超える作品を意識してこの曲を作曲したと言われています。

驚きの超名演

私はこのCDを中古CD店で偶然見つけたのですが、前述した通り、聴くに90分もかかる大曲なので、まずは片岡先生の声を聴きたくて声楽が出てくる第4楽章から聴き始めました。出だしはアルトの独唱から始まります。演奏は日本を代表する名メゾソプラノ歌手「伊原直子」さんです。深みのあるしっとりとした歌唱で神々しさも感じられます。そしていよいよ片岡先生の登場です。まさしくレッスン中に何度も聞こえたあの美しいベルカント、しかも圧倒的な声量でした。さらに、フィナーレに向かって盛り上がる合唱の何と素晴らしいこと！もう感動で声も出ませんでした。指揮者のロリン・マゼール恐るべし！！

この時のマゼールについて、片岡先生はこんなお話を聞かせてくださいました。練習で、どうしても先生が納得してうまく歌うことができない箇所があったそうです。ところがゲネプロ（本番前の通し練習）で、音楽がその場所にさしかかった時、ふいにマゼールが先生の方を向いて指揮棒をフワッと動かした瞬間、そこが見事に歌えてしまったそうです。先生ご自身信じられなかったそうです。

今でこそマーラーの交響曲は世界中のオーケストラで演奏されており、著名な指揮者によるCD全集もいくつも作られています。今から38年前の日本で、しかも日本の演奏家達がこのような素晴らしい演奏をしていたなんて信じられないことです。録音でこれだけ凄いのですから、もしその場で聴いていたらどれほどの感動だったことでしょう。ぜひ、多くの人に聴いてもらいたい演奏です。

改めて、このような素晴らしい演奏をされてきた先生を尊敬し、教えて頂ける幸せを感じている今日この頃です。

（文責 S.O）